ペンを槌に替えて
――学徒勤労動員中の日々――

●下井草一丁目
高松　一子
（昭和二年生まれ）

昭和一八年六月に政府が決めた「学徒戦時勤労動員命令」により、学徒は学業を休止して軍需生産に従事することとなり、戦争末期から敗戦まで約三〇〇万人の学徒が動員されたということであるが、私もその一人であった。

当時岐阜県の大垣高等女学校に在学中の私たちは、薙刀や乗馬の訓練、分列行進、救助訓練などが授業に組み込まれ、校庭を耕してさつま芋の畑にしたり、繊維工場へ働きに行ったり、出征軍人の留守宅の稲刈りの手伝いに行ったりしていたが、昭和一九年六月から軍需工場へ動員されることになった。通学区域別に住友通信、日本紡績、太平洋工業、大垣鉄鋼、東海航空など近郊の工場へ行くことになった。近鉄揖斐線で通っていた私たちは、北大垣駅からかなり歩いて東海航空へ通うことになった。はじめは一週間に一日ずつの登校日があったが、それもなくなり、そのうちに日曜日も隔週にしか休めなくなり、当然ながら夏休みもなくなった。

そのころは制服もスフ入りで、襟にかける白い布地にさえことかいていた。工場へは和服を縫い直したモンペの上下を着て、黒っぽい布で自分で作ったリュック（頭陀袋と言っていた）を背負い、防空頭巾を肩から下げて、手縫いの足袋に粗末な下駄を履いていた。その下駄さえもなかなか手に入らなかった。いざという時のために胸に血液型を書いた名札をつけて通っていた。

東海航空の工場では飛行機の部品を作っていた。大きなフロートにへばりつくようにして鋲を打ったこともあったが、後にはメタノールを入れる燃料タンクの組立てに専念した。七〇センチ角、三〇センチ位の厚みで丸みを帯びたいびつな形をしたタンクで、厚いアルミの板をローラーや木槌を使って形を作り、二枚のジュラルミンの隔壁を中にはさんで、溶接して貫って組み立てていくのであった。溶接工は動員された農家のおじさんたちであった。圧力検査で何度も戻されて、溶接し直して一基のタンクの出来上がった時の嬉しさ。国のために働いているという充実感を味わっていた。午後の三時に学生たちだけバラックの食堂へ行って、大きなおにぎりのおやつを頂いた。

必勝の鉢巻き締めて槌握り気負いて戦担いし日あり

戦争末期にはよく空襲警報のサイレンがなった。工場の北西一〇〇メートル位にあった森へいっさんに走って逃げこんだ。静かな森の梢の合間から敵機のかげを見たこともあった。「ここで爆弾を落とされたらおしまいね」と言いながら一瞬緊張したことを覚えている。

槌捨てて空襲避けし森深く見上げし合歓の花を忘れず

昭和二〇年三月に卒業証書をもらった後も、専攻科に在学ということで引き続き工場で働いていた。広島に原爆の投下されたすこし前の七月二九日の空襲で、大垣高等女学校は奉安殿と弓道場を残して全焼してしまった。空襲の夜は一五キロほど離れた自宅の庭から、大垣の方の空を見ながら、焼夷弾が光りながら、雨が降るように落ちていく美しさに見とれていた。

焼夷弾遠く降る夜を佇ちつくす

母校が灰と化すとも知らず

戦火にて焼けし校舎の化学室

師とがむしゃらに何を探しき

昭和二〇年八月一五日、工場の前の広場に長いこと並んでいて玉音放送を聞いた。意味がよく分からず、天皇陛下が激励されたと思った。それにしても作業はせずにすぐ帰ることになった不思議な日だと思った。

夏草の蒸れる暑い暑い一本道を、列をつくって駅に向かって歩きながら、「戦争が終わったのかも知れない」「日本が負けたのかもしれない」「そんな筈ないわ」みんなが口々に言いながら、半信半疑で家へ帰った。父から敗戦を聞かされて泣けてきた。信じていたものが一挙に崩れ去ったあの虚脱感は忘れられない。泣けて泣けて夜まで泣いた。

自由なる思想も知らず敗戦の祖国憂いし青春なりき

怒りと悲しみの涙

●上高井戸一丁目
竹間　哲夫
（昭和五年生まれ）

私の生まれた埼玉県東松山市には、町中に上沼と下沼という農業用水の大きな沼があり、その周囲には桜の古木の並木が続いていた。春になると一斉に桜の花が咲き、私たちは新しい教科書を鞄に詰め、新学期を迎えた喜びをかみしめながら、その花のトンネルを潜ったものであった。

ところが昭和一九年のある日、突然、その桜の木が切り倒されてしまった。聞くところによると、家庭の燃料である薪の配給割当て分が不足してしまったので、町がこの桜の木を薪にして、配給してしまったのである。切り株の直径が五〇センチもある物ばかりで、その切り口からしばらくは、しっとりと水がにじんでいた。

子供心に、切られた木が血か涙を流しているのかもしれないと同情していた。それからしばらくして、切り口の近くに伸びていた桜の小枝に、

配給の　薪（まき）には咲かぬ　桜かな

というボール紙の短冊がさがっていた。

どこの誰か知らないが、この切り株の変わり果てた様子を眺めて、私と同じように悲しい気持ちになった人がいること、その人が桜の木の挽歌（ばんか）を唄ってくれたのだという事に、ひどく感激したものである。

＊　＊　＊

戦争のころの思い出に関しては、悲惨なものばかり多い。いよいよ戦争末期の負け戦で、東松山のジーゼル機器工場が艦載機グラマン戦闘機のロケット攻撃を受けたことがある。

私たちは昼過ぎ、校庭の裏山で腹が減ったままゴロ寝の休憩をしていた。突然、独特の金属音を響かせて、超低空の敵機が頭上を通過しながらロケット弾を発射させるところであった。

操縦席に座っている若いアメリカの青年というより、少年らしい顔付きまで、覗ける距離であった。

この攻撃で私たちの小学校の同級生で、ジーゼル機器工場に勤務していた工員がお尻に被弾して、怪我をしたと言う話を聞いた事がある。

たまたまトイレに入っていたので、ウンが悪かったなどと風評が立ったが、報道管制が厳しく、一切被害の状況の発表はないままおわった。

私が知っている空襲で最もひどかったのは、三月一〇日の東京大空襲であったろう。

一晩で東京の東半分が焼け野原になってしまい、その時の被害者で死亡したものが六〇万とも、七〇万とも言われている。

夜中から朝まで東京の空は真っ赤にそまり、そこから五〇キロも離れている私たち東松山の地で立ち上がって眺めている夜中に、くっきりと反対側に影法師ができる程だった。

それからしばらくして敗戦となり、いくつかの混乱の末学校の授業が再開されるようになった。

この空襲で焼け出されてきた国漢の先生がいた。この先生の授業で、

国敗れて山河あり
城春にして草木深し

という漢詩の朗読中、先生は突然まぶたに涙を浮かべ、じっと天井の一角を見つめながら、絶句してしまった事がある。

東京大空襲のあのメラメラと燃え上がる炎の激しさ、その中を逃げ回る仲間の人達の悲しい地獄図を想い出したのであろう。

しばらくして、流れる涙を拭こうともせず、閉じていた目をカッと開き、即席の俳句を黒板に書いた。

眼開けば　劫火たちまち　青嵐

仏教の教えで言われている世界を焼き滅ぼしてしまうような大火も、戦争が終わってみると、それが嘘のように、残った木々には青い芽が吹きだし、焼け野原には雑草がおい繁り、快く吹く南風がその緑をサッと揺らせて吹き抜けて行く。

まぶたの裏側に焼き付いている紅蓮の炎に焼かれた人達の赤と、生き延びて青嵐の緑の中で生活している自分の人間模様を、先生は怒りと悲しみを込めて唄ったのであろう。

桜の樹からじわじわと流れ出した涙、怒りと悲しみに震えながら先生のまぶたからとめどもなく流れた涙、私たちは再びこのような涙を次の世代の子供たちのために流したくない。

沖縄戦に生きて!!

●阿佐谷北六丁目
水崎　正之助
（大正八年生まれ）

沖縄戦に一機関銃中隊長として参加、火炎放射器攻撃により右眼失明、左眼視力0.1、臀部左右機関銃弾による貫通、左脚、手榴弾により盲貫（もうかん）の重傷を負い、九死に一生を得て運よく奇跡的に生還。

一個中隊の兵員は一四八名……生還して内地に復員した者は私を含めて僅かに四名。

戦後の苦難の道に耐え、何とか生活が出来るようになった今、四七年前の戦を想起し回想することしばし。

私は昭和一五年近衛師団に入営、当時の日本の社会はファシズムと、本格的に日中戦争に突入した重苦しい時代で、私の青春のなかで最も暗い時代であった。

私はいかにして戦争に引きずり込まれたか、私は心から戦争を嫌悪する。争いごとは個人的にも御免蒙むる。勝っても負けても得をするものは何一つない。生命・財産は元より人間の良心さえも失なってしまう。

私共は残念ながら事志と異なり、あの第二次大戦ではいつの間にか、一兵士として、あるいは将校として弾丸降りしきる最前線の真只中に身を曝（さら）し、白兵戦を演じ、機関銃の一射手として撃ちまくり、何発かは敵の陣地に炸裂し、何人も殺傷したかも知れない。

その事を悔いているわけではない。それが与えられた使命であり、その逆の被害者の場合もあったからだ。殺生なんて不道徳は吹っ飛んでしまっている。国のためなどという気負いはない。負けたくないという、殺すか殺されるかの二者択一を迫られて誰が後者を選ぶものか。軍隊生活の苦闘は戦闘だけではない。戦はひとときのもの、前後の長期にわたる道程は敢えて言わない。

沖縄戦線にあって絶体絶命の総力戦、日本本土を死守せよ、迫り来る物量をほこる米上陸部隊の脅威に立ち向かった武器なき兵士たちの苛酷な戦闘の日々、私は必ずいつの日か命を絶つものと考えていた。

戦争が終わったと知った時、口惜しいというより、これで戦争から解放されたと、言葉こそ出なかったが、しみじみした思いが胸にこみあげてきた。同時に若くして戦場に散った多くの身近な部下及び戦友のうめき声が耳を打って留めどもなく涙が出て止らなかった。

痩せ細った体でボロのシャツとズボンをまとい、僅かな手荷物を背負い、復員したのが浦賀港である。廃墟と化した東京の街を眺め呆然。長崎、広島の原爆犠牲者を始め、各地の空襲で銃後の人たちにも厖大な死傷者が出たと言うことを知って、戦争の空しさを痛感した。〝聖域〟〝大東亜共栄圏〟〝楽土建設〟と称して戦を遂行し、得たものは、中国、韓国、東南アジアの人々の怨嗟の声だけではなかったか。また、我々が戦闘に参加したこと事態は侵略戦争という事になってしまった。

幸いにして九死に一生を得て帰国出来た私は、昭和一五年入隊の時はむしろ何のためらいもなく、喜び勇んで家を出た状態はどうしたことか。当時は軍人が左右する政治であり、これに迎合するマスコミであり、社会全般が愛国の名を借りる好戦的風潮であったといってよい。

当時の事は、今の自由を謳歌する青少年には想像もつくまい。戦争に駆り立てられ、熱して行く動向が国民の隅々まで漲っていた。国のため、天皇陛下のためというスローガンの下に、一片の反対思想も許されない状態であった。まして言葉に発し行動に移る者など、憲兵や特高警察によって容赦なく刑務所にブチ込まれた。我が子、我が夫を失なった遺族が、『息子や夫が御国のため命を捧げた事は一家の名誉です』ということが、美談として数多く新聞誌上に取り上げられた。

思えば、我々は幼いころから「僕は軍人大好きよ」などと唱歌を唄い、兵隊ゴッコに現を抜かし、教育勅語を意味も分らぬ年ごろから何回となく聞かされ、今だに「君に忠に親に孝に……一旦緩急あれば義勇公に報じ」などという語句が頭に残っている。学校では軍事訓練が相当に厳しくなり、日中戦争は益々泥沼化し南京陥落の提灯行列、万歳の連呼が街に満ちた。戦傷兵士も白衣の勇士として尊厳の眼で見つめられたが、遺骨の凱旋はさすがに戦争のいたましさを感じさせた。

戦後既に四七年、敗戦国として世界に例のない驚異的な経済発展を遂げ、平和国家として未来永劫の地位を確保した。戦争の惨禍を全く知らない若者の世代が多くなってきた現在、果たしてこの平和な状態がいつまで続くだろうか？

現在も世界の各地で戦闘に等しい闘争が間断なく続く。ロシア共産主義国の崩壊、これに続いて東欧社会主義国の崩潰、深刻な経済摩擦、限りない局地の争いが起きていて、各国は決して安定しているとは思わない。世界は決して平穏ではない。緊張の中に辛うじて平和が保たれているに過ぎない。

今、私は声を大にして言いたい!!

戦争喚起の風潮を作るな。

戦争はするものではない。

戦争に巻き込まれるな。

戦争は瞬時に尊い命を奪ってしまう。〝一将功成りて万卒枯る〟の諺の如く一将の勲章のため生命を失うな。

〝苔むす屍や、水漬く屍〟は、我々の時代で永遠に終わりとしたい。

私は以上のように戦争体験を踏まえて戦争反対を訴える。

（作者は投稿後ご他界されました。ごめい福をお祈りします。）